

「～吾が故郷は上桜田地区の
寺社シリーズ No 8～
「 耕源寺 （1） 」」

回
覧
⑨

今回は、曹洞宗「神龍山耕源寺（住職；武田淳光さん）」を取り上げ、その1回目で、正門に立ちはだかる石門柱に焦点を当てます。

場所は、東北芸術工科大学の東側、図－1の「ここ」の所です。正門から本堂を見上げた風景は図－2のとおりです。



図－1

1. 歴史

細部は、「瀧山の歴史」――同編集委員会が編纂し、平成16(2004)年10月1日付で発刊／復刻版は滝山交流センターで購入可ーを見ていただく事とし、ここでは概要を記述しておきます。同寺は、平清水の清水山耕龍寺第八世宗虎大和尚に依って開山され、開基は文亀3(1503)年とも、永正10(1513)年とも言われて、当時の宗派は天台宗であった、との

事です。その後、幾度か火災に遭い、歴史を詳細に物語る資料や寺宝は失われたと言われています。現在の本堂は16世太禅和尚代の明治12(1879)年に再建したものです。



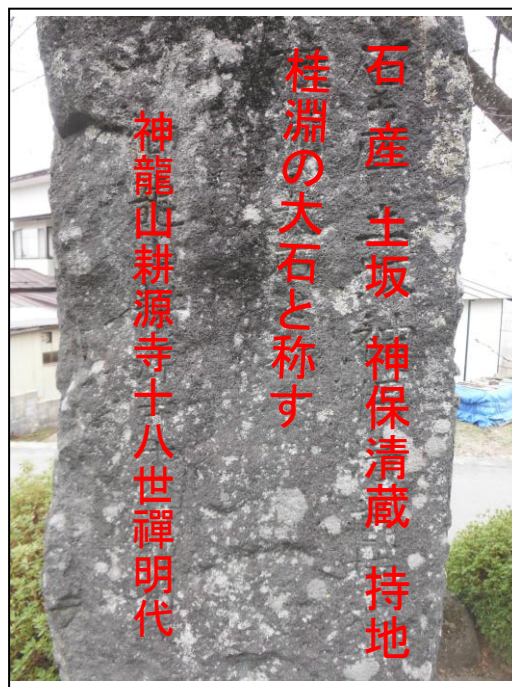
図－2

2. 石門柱のこと（鳥居？）

これについては前出「瀧山の歴史」の359ページ「莫産村長 丹野安太郎」の処に若干触れられているが、流布している書き物には余り詳しくない事を取り上げて見ます。

（1）石の産地？

本堂に向かって左（北）側の石門柱の裏（東）面には、図－3のとおり右側から「石産 土坂 神保清蔵 持地 桂淵の大石と称す 神龍山耕源寺第十八世禪明代」と刻字がある。それでは石の産地である「桂淵」とはどここの場所なのか、と知りたくなり、そこで、平成24(2012)年4月下旬、土坂は神保清蔵さんご子孫（後代）のJ・Kさんから聞き取りを行い、その場所を探て行くと図－4の場所の龍山川（文字は国土地理院地形図に依る）流域の河原である事が分かりました。



図－3



図－4

2016(平成28)年8月15日
上桜田町内会長

（2）石の大きさ・重さ？

石門柱の大きさを現地で、実測して見ました。

幅と奥行きは91cm（3尺四方）である。底部が地中にどの程度埋まっているのか否か、判断は付かないが、高さは、脚立の上からの測定なので正確ではないものの、全長は5mほど（前後）であると想定しました。石の密度（比重）は、正確な材質が分からないので、石の平均的な密度（比重）である1m³当たり2.65トンを適用して、重量を試算して見ると、約11[トン／本]、2本では総重量22トンとなる。1本当たり少なく

とも10トン以上はある事が分り、運搬から建設までどのような手段を構じたのか、増々関心が高まって来ました。

（3）寺までの運搬手段は？

いわゆる「くるま（木車・荷車）」はスムーズな移動手段としては好都合である。しかし、一方で、ブレーキ（制動）操作を考えると油断からの暴走の危険も想定される。また、「木車」「荷車」は、あの大きさの重量を支えるものとなると、構造的にはどうなのか、などの問題も考えられる。それらを総合勘案すると、雪が固まって来る春先の「そり」利用が一番適切な方法ではなかったか、という事が考えられる。案の定、前出J・Kさんに依ると春先に「そり」を利用したとの事。その「そり」は、しばらく、耕源寺の梵鐘の所に掛けてあった、というのが、現在は無くなっています。

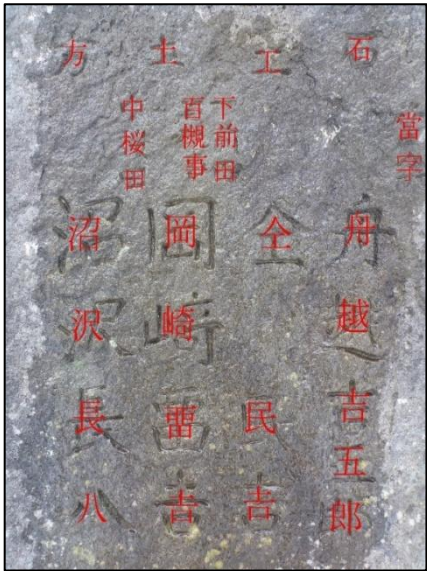
（4）建設資金は誰が出したのか（今様のスポンサーは）？

本堂に向かって右（南）側の石門柱の裏（東）面上部には、次ページ図－5のとおり右側から「信心手傳出夫千人 余 明治四十年四月十九日 元木 三代 丹野安太郎 建立」との刻字がある。その背景については、前記「瀧山の歴史」の359ページ「莫産村長 丹野安太郎」の

処に触れられています。明治 22(1889)年 4 月 1 日滝山村が成立しているが、明治 41(1908)年に第六代同村長に就任した丹野安太郎さんが建立したのある。一切の費用に私費を投じ完成させたのである。現代の某政治家達よ見習え給え、と叫びたいが！・・・。



図－ 5



図－ 6

当初はまったく想像出来なかった。そうした中で、前出の J・K さんから、「工事中の写真が耕源寺の檀徒が集まる茶の間にある」と教えられた事から、耕源寺に行って、確認した処、図－ 7 のとおりの見事なものがありました。石柱を囲み、縦横無尽に木のやぐら（足場）を組んで建てた事が分かる。大掛かりな足場という事が読み取れます。現地の写真の両側に説明文を貼っているが、これは、当地の故 O・U さんが整理してくれたとの事であります。写真撮影者は中桜田の沼沢長一さんとも記載されています。とても貴重なものだと思う。本堂の建物内に入って、右手の廊下を進んで右側にある檀徒の控室と言われる畳部屋に掲示

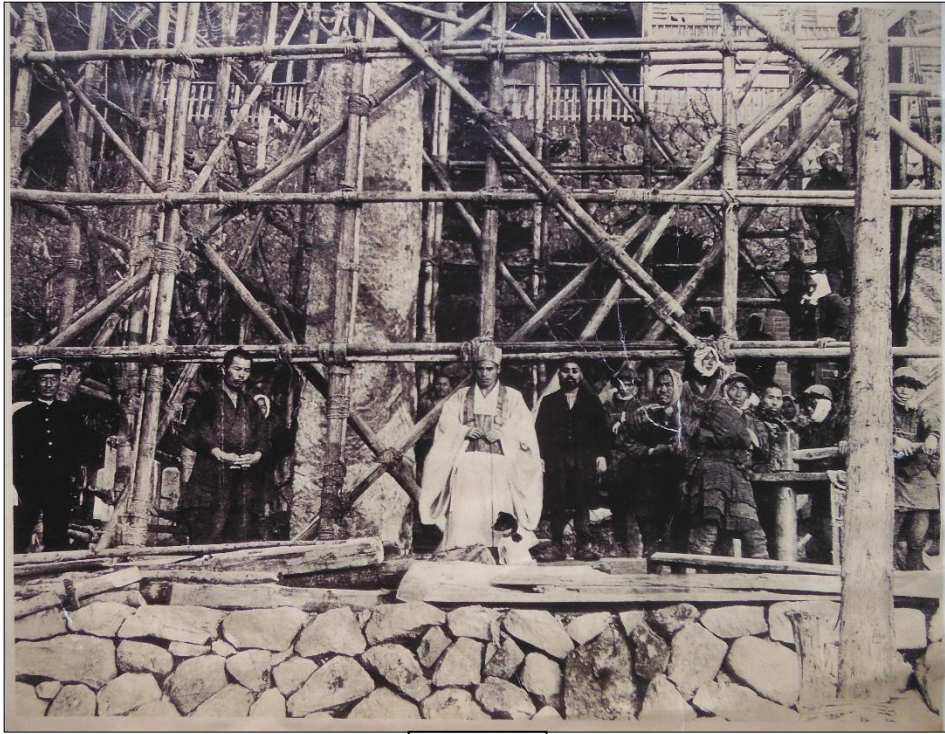
（５）石工や土工の責任者（現場指揮官）は誰だったのか？

図－ 6 のとおりで、本堂に向かって右（南）側の石門柱の裏（東側）下部に刻字されている。それに依ると、石工は、舟越吉五郎、舟越民吉の両名、土方は下前田の岡崎留（留）吉、中桜田の沼沢長八の両名となっています。石工は「當字」である地元上桜田のこの二人だろうが、土方（土工）については、運搬から建柱までの指揮を執った人夫の代表（責任者・現場監督）であろうか。

きれいにバランスの良い直方体に石割した高度な技巧派石工や、運搬から足場建設、そして建立までの卓越した技能・技量の持ち主が集まり、これら 1 千人もの人達を指揮監督・統率配した土方（責任者）の人は選ばれた仁徳者であろうから、大きな尊敬の念で賞賛したい。もちろん、技術専門集団だけではなく、助力として尽力した近隣在郷の村人達にも敬意を払いたく思います。

（６）どんな仕掛けで建柱したのか？

1 本当り 11 トンもの重量がある物をどのような仕掛けで建柱したのか、



図－ 7

されてあるが、檀徒でも知らない人が多いようであります。

（７）過去の幾多の地震で倒壊しなかったのか？

記憶にある処でも、平成 23(2011)年 3 月 11 日の東日本大震災、昭和 39(1964)年 6 月 16 日の新潟地震に遭い、その時は、この石門柱の南側 5～6 m の所の墓石が何基か倒れたが、この石門柱そのものはまったく異状が無かった、という事です。確かに、底部を見ても、この石門柱の位置が滑り動いたり、台座石に亀裂が入ったり、本体が傾いた形跡が全くありません。それにしても、現地の底部を見ると分かるが、1 m もの深く埋設されているは思えない。何か、現代の東京はスカイツリーの耐震対策に通じるものを感じます。

（８）俳句の存在？

この石門柱について、様々な人達に足を運び、お話を伺う中で、まったく想定外の事があった。当町内会の F・M さんから、同石門柱には、工事に当たったのエピソード的物語の俳句が刻まれている、と聞きました。何回も石の四方面を眺めていたが、当初はまったく気づかなかった。本堂に向かって左（北）側の石門柱の北面に、俳句が刻字されている事が分かりました。その様子が図－ 8 のとおりである。現地では石が風化し、判読し難くなっています。この句を詠んだ背景は次のとおり。当初は、現地に運んだ石に磨きを掛けて、表面を平らに仕上げて立派に見えるようにする計画であったが、建設・運搬等の工事に予想外の労力費（人夫賃）が掛ってしまい、資金も不足するような状況になった。そこで、切り出した状態のままで建設する事にし、むしろその方が良いと

して、丹野村長（雅号「萊山」）は、そのような俳句を読んで（捧げて）、石に刻んだ、という。

「かぎりなく 太る二本の 石の苔」

私は次の様に解釈している。

「石を切出したそのままの状態だと凹凸がある事から雨の湿気と塵埃が溜まり易く、年月が経ち、やがてはこの 2 本の石に苔が生えて来る、さらに年を重ねて行くほどに苔の上に苔が重なり生えて苔で太って行く、そうすると後世の人からは、立派なものとして有難く見られるのではないか。だから、磨きを掛けないで、このまま（石割した自然のまま）で建てた方が、趣が増して来るので良いのだ。」さらに私は、当時の丹野村長の心の内奥を勝手に想像して見ました。「凛として未来永劫に亘って立て続け、苔の上に苔が重ね生えて太って行けば、二本（に

ほん）の石は、「日本一」——二本と日本をかけた——の立派な石になって行くであろう。その事に、寺が幾千年も万年も栄えて、合わせて上桜田・滝山村（地区）と日本の恒久の繁栄・発展と平和の祈願を込めて建立したものである。」さらには「日本国家の『君が代』（・・・このむすまで。）に繋げたいとの心情も織り込んだのではないか」と解釈している。まさに、「資金枯渇というピンチに見舞われたが、よし、地域の総力で建立したこの石門柱に永遠の繁栄を託して希望の印としよう！」とチャンスに変えた救世主的存在を感じました。 また、右上には、明治 卅七八年戦歿記念」の文字は、日露戦争の戦没者の慰霊を込めたものであります。

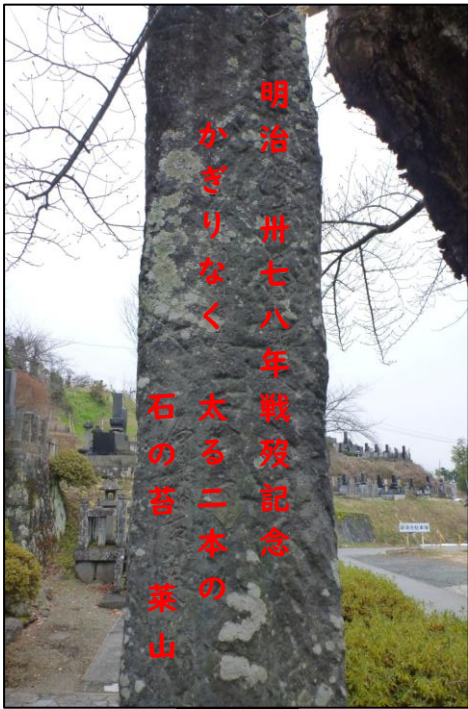
【編集後記】

・ご協力を賜った武田淳光住職さんご家族に感謝申し上げます。

・細部は紹介出来なかったが、同寺の本堂天井には「六道輪廻図」が描かれており、位牌堂には釈迦如来坐像を囲んで「五百羅漢」が祀られており、圧巻・荘厳です。

以上

（上桜田町内会 総務担当 大沼香）



図－ 8